

ユネスコ無形文化遺産登録

# 尾張津島天王祭

こんなに素晴らしい祭文化

WEB版

著者：浅井厚視・黒田剛司

発行：信長の台所歴史検定「津島の達人」実行委員会

## はじめに

平成28年11月30日（日本時間12月1日未明）、エチオピアの首都アディスアベバで開かれた国連教育科学文化機関（ユネスコ）の政府間委員会は、日本が無形文化遺産に提案していた「山・鉾・屋台行事」の登録を決定しました。日本の登録は2014年の「和紙」以来2年ぶりで、国内の無形文化遺産は計21件となります。

「山・鉾・屋台行事」（国重要無形民俗文化財）は以下の祭礼です。なお、「日立風流物」と「京都祇園祭の山鉾行事」は既に、ユネスコ無形文化遺産になっています。

- ・八戸三社大祭の山車行事（青森県八戸市）
- ・角館祭りのやま行事（秋田県仙北市）
- ・土崎神明社祭の曳山行事（秋田県秋田市）
- ・花輪祭の屋台行事（秋田県鹿角市）
- ・新庄まつりの山車行事（山形県新庄市）
- ・日立風流物（茨城県日立市）
- ・烏山の山あげ行事（栃木県那須烏山市）
- ・鹿沼今宮神社祭の屋台行事（栃木県鹿沼市）
- ・秩父祭の屋台行事と神楽（埼玉県秩父市）
- ・川越氷川祭の山車行事（埼玉県川越市）
- ・佐原の山車行事（千葉県香取市）
- ・高岡御車山祭の御車山行事（富山県高岡市）
- ・魚津のタテモン行事（富山県魚津市）
- ・城端神明宮祭の曳山行事（富山県南砺市）
- ・青柏祭の曳山行事（石川県七尾市）
- ・高山祭の屋台行事（岐阜県高山市）
- ・古川祭の起し太鼓・屋台行事（岐阜県飛騨市）
- ・大垣祭の軸行事（岐阜県大垣市）
- ・尾張津島天王祭の車楽舟行事（愛知県津島市・愛西市）
- ・知立の山車文楽とからくり（愛知県知立市）
- ・犬山祭の車山行事（愛知県犬山市）
- ・亀崎潮干祭の山車行事（愛知県半田市）
- ・須成祭の車楽船行事と神葎流し（愛知県蟹江町）
- ・鳥出神社の鯨船行事（三重県四日市市）
- ・上野天神祭のダンジリ行事（三重県伊賀市）
- ・桑名石取祭の祭車行事（三重県桑名市）

- ・長浜曳山祭の曳山行事（滋賀県長浜市）
- ・京都祇園祭の山鉾行事（京都府京都市）
- ・博多祇園山笠行事（福岡県福岡市）
- ・戸畑祇園大山笠行事（福岡県北九州市）
- ・唐津くんちの曳山行事（佐賀県唐津市）
- ・八代妙見祭の神幸行事（熊本県八代市）
- ・日田祇園の曳山行事（大分県日田市）

愛知県の「山・鉾・屋台行事」に該当する国重要無形民俗文化財は5件もあります。

「尾張津島天王祭の車楽舟行事」（昭和55年国指定）、「知立の山車文楽とからくり」（平成2年国指定）、「犬山祭の車山行事」（平成18年国指定）、「亀崎潮干祭の山車行事」（平成18年国指定）、「須成祭の車楽船行事と神葎流し」（平成24年国指定）の5件です。愛知県の中では、「尾張津島天王祭の車楽舟行事」が最も早く国重要無形民俗文化財に指定されています。

海部津島からは2件あります。「尾張津島天王祭の車楽舟行事」「須成祭の車楽船行事と神葎流し」です。ともに、かつての祭神牛頭天王の神社祭礼です。

ユネスコ無形文化遺産に「尾張津島天王祭の車楽舟行事」が登録されることは、津島市の伝統文化の価値や魅力が高く評価されたものと考えられます。津島市の全国へのアピールになるとともに、市民のふるさとの歴史と文化に対する再認識につながることを期待されます。

## 津島牛頭天王社の祭礼

祭には、神社の祭神に何かを祈願するという目的があります。したがって、その祭神のご神徳、神威すなわち御利益（ごりやく）を知ることによっ

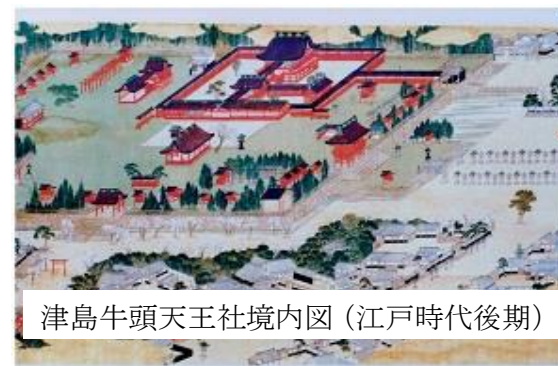
て、本来は何を祈願していた祭であったかが分かります。

中世以来、津島神社は津島牛頭天王社（つしまごずてんのうじゃ）あるいは津島天王社と呼ばれ、牛頭天王（ごずてんのう）を祭祀していましたが、明治政府の神仏分離令により、明治2年（1869）に「津島神社」と改称しました。

津島牛頭天王社は、疫病退散の御利益で全国的な信仰を集めていました。尾張津島天王祭は、津島牛頭天王社の祭礼でした。したがって、津島牛頭天王社と祭神の牛頭天王を知るとは、尾張津島天王祭が夏に行われる目的などを知ることにつながります。

今から840年前の『七寺一切経（ななつでらいっさいきょう）』（七寺、名古屋市中区大須2）の内、承安5年（1175）に書き写された「大般若経（だいはんにゃきょう）」の巻末印記に「津嶋」と記されていたことから、当時の「津島社」は伊勢内宮・外宮、白山妙理権現、熊野三所大神社、山王三聖（日吉大社）、南宮大社（美濃国一宮）、多度大社とともに有数の大社となっていたことがわかります。

13世紀以降、津島社は大きく発展しました。それは、牛頭天王を祭神とする神社であったためです。中世の社会において、疫病（えきびょう）の流行は飢餓とともに、最も恐れられたものでした。疫病退散の神社は、京都の祇園社（ぎおんしゃ）以東では、津島牛頭天王社が最も有名でしたので、村々では津島牛頭天王社を勧請して分霊社を建立し、村に疫病が流行しないことを祈願しました。現在、全国に津島神社の分霊社・末社は約3000社あり、分霊社の数では、全国の大社の8位となっています。



戦国期には織田信長のみならず、豊臣秀吉・秀頼も津島牛頭天王社への信仰が深く、多大な寄進をしています。

織田信長が弘治4年（1558）に尾張津島天王祭を見物に訪れた古記録も残っています。また、織田家と津島牛頭天王社は同じ「木瓜紋（もっこうもん）」です。

津島神社の国重要文化財の楼門（ろうもん）は、豊臣秀吉が母の大政所の病氣平癒を願って寄進したものです。本殿（国重要文化財）は、徳川家康の4男である松平忠吉（清須城主）の妻 政子の平癒祈願によって寄進造替されました。共通しているのは病氣平癒のためということです。いかに津島牛頭天王社が疫病退散、病氣平癒のご神徳により、中近世に信仰されていたかが分かります。

明治元年（1868）、明治新政府の「神仏分離令」により、神宮寺の「本地仏（ほんちぶつ）」（薬師如来）の撤去、鰐口（わにぐち）、梵鐘（ぼんしょう）、仏具・経典など仏教に関わる物すべてが境内から撤去されました。そして、明治2年（1869）に津島牛頭天王社から「津島神社」と改称しました。祭神は建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）で、大己貴命（おおなむちのみこと）を配祀しています。

## 祭神牛頭天王と祭礼

津島神社が津島牛頭天王社と称していた時代の祭神は牛頭天王でした。この牛頭天王はいかなる神であったのでしょうか。

平安時代には、朝廷の政争に敗れて怨みをもって死んでいった貴人が祟って疫病（えきびょう）、雷や火事を起こすものと信じられていました。この怨霊（おんりょう）を鎮める儀式が御霊会（ごりょうえ）です。御霊会の儀式では仏教経典の読経とともに、歌舞音曲や民衆参加の踊りなども行われ

ました。

平安時代の初期、桓武天皇の時代に全国各地で疫病が流行しました。これは怨霊の祟り（たたり）であるとされ、貞観5年（863）に神泉苑において御霊会が行われました。この時に慰霊された御霊は崇道（すどう）天皇・火雷神の菅原道真ら7人でした。

平安時代には京都の祇園社（ぎおんしゃ）（現 八坂神社）の祭神牛頭天王は「祇園天神」と称され、荒ぶる神として京の人々から畏怖されていました。祇園祭は祇園御霊会とも呼ばれていました。このように御霊会に起源をもつ牛頭天王系統の祭は、牛頭天王の荒ぶる魂を鎮め、慰める目的で行われました。

祭神の牛頭天王は疫病退散（えきびょうたいさん）の神です。中世の牛頭天王を祀る大社には、祇園社（京都、現 八坂神社）、津島牛頭天王社（愛知、現 津島神社）、廣峯牛頭天王社（兵庫、現 廣峯神社）などがあり、なかでも祇園社と津島牛頭天王社が二大神社で「西の祇園社、東の津島社」とも称されました。津島牛頭天王社は牛頭天王信仰の聖地だったのです。

疫病は牛頭天王の荒魂（あらみたま）すなわち、荒ぶる神が起こすと信じられていたため、当時の人々は、荒ぶる神が優しい神（和魂 にぎみたま）になれば、疫病は起きないと考えたのです。そのために



津島牛頭天王神像（興禅寺）

牛頭天王を慰撫しようとしします。その方法は読経、歌舞、音曲、走り馬などでした。

疫病（伝染病）の多くは暑い夏に発生します。夏に疫病が起らず、人々が無事に過ごすことを祈るために、全国の牛頭天王を祀る神社では夏の祭礼が行われるようになりました。牛頭天王を喜ばせ、楽しませれば、優しい神となり、疫病を流行させないと信じられていたのです。

京都の祇園社の祇園祭のように、都市部では山鉦(やまぼこ)や山車(だし)、屋台(やたい)を華麗に飾り、行列や歌舞をとまなう風流(ふりゅう)が行われ、華美を競いあいました。尾張の津島でも華麗な天王祭が行われるようになったことから、町衆の経済力が京と同じくらいに豊かであったことが分かります。

祇園祭と尾張津島天王祭は、日本の各地で行われている夏祭の様式に大きな影響を及ぼしたといえます。

## 尾張津島天王祭の祭様式

尾張津島天王祭は「津島のお天王さま」とも呼ばれた津島牛頭天王社の祭礼であり、陰暦6月14日に宵祭、15日に朝祭が行われていました。現在は7月第4土曜日と翌日曜日に行われています。

京都の祇園祭では山鉦巡行が陸上で行われます。一方、尾張津島天王祭は川が舞台で、水上に舟を浮かべて行います。それは、津島が鎌倉時代から伊勢と尾張を舟でつなぐ湊町だったからです。また、津島の昔人が、車楽(だんじり)を舟に載せるという独創的な発想を持っていたことがうかがえます。中世に巖島神社(いつくしまじんじゃ)の管絃祭(かんげんさい)のように御座船として神輿(みこし)を船に載せて渡御(とぎょ)することはありましたが、川を漕ぎ進む車楽舟は例のないことでした。

尾張津島天王祭は、その主宰者という観点から大別すると、7月第4土曜日(陰暦6月14日)の夜に津島五ヶ村が行う「宵祭(試楽)」、翌日(陰暦6月15日)の朝に市江(いちえ)と津島五ヶ村が行う「朝祭」、朝祭が終わった深夜(陰暦6月16日深夜)に神社が行う「神葎(みよし)流し神事」の3つの行事・神事からなっています。尾張津島天王祭の宵祭・朝祭は、氏子である町方衆(まちかたしゅう)が疫病退散・病氣平癒のご神徳を願う祭礼です。神職による神葎流し神事は、疫病をもたらす疫神・悪神を神葎に憑けて川に流し去る神事といえます。

宵祭には、津島五ヶ村の米之座(こめのざ)・堤下(とうげ)・筏場(いかだば)・今市場(いまいちば)・下構(しもがまえ)から数多(あまた)の提灯を飾った巻藁舟(まきわらぶね)5艘が出ます。市江は出船せず、星宮(ほしのみや)で試楽(しがく)を行います。市江は津島から南に4kmに位置する地域で、市江7ヶ村とも称しました。

朝祭には津島五ヶ村の車楽舟(だんじりぶね)5艘と市江から1艘、あわせて6艘が出されます。江戸時代以前から市江の車楽舟が津島の車楽舟5艘の先に漕ぎ進む定めです。

津島牛頭天王社の神官であった真野時綱(まのときつな)が著した『尾州津島天王祭記』(正徳2年(1712))には「この六月の船祭は悉く橋越の神民地士の神勤にして、神家は唯神前の神輿を奉飾し、十四日時丑の神饞のみを勤むる」と記されているように、尾張津島天王祭の宵祭と朝祭は氏子(うじこ)が担い手です。この伝統は今も変わらず、尾張津島天王祭協賛会と市江車協賛会が祭の担い手です。

尾張津島天王祭では祭舟を単に「車(くるま)」と呼び、市江車、津島五車とも呼びます。

尾張津島天王祭の市江と津島五ヶ村の祭の主宰者・世話人は「車屋(くるまや)」と呼ばれます。江戸時代の車屋は、尾張津島天王祭期間中は苗字帯刀が許されました。津島五ヶ村の今市場・筏場・下構・堤下・米之座の車

家は有力者（庄屋格・町年寄格の2家）がなりました。一方、市江は、江戸時代から東保村（現 愛西市東保町）の宇佐美家と荷之上村（現 弥富市荷之上町）の服部家の2家が代々車屋を世襲しています。

宵祭、朝祭、神葎流し神事の祭様式について記します。

## 1、宵祭

津島五ヶ村と称された地域の経済が発展した戦国時代の16世紀中頃から江戸時代中期の17世紀中頃までの約100年の間に、雅な京文化が取り入れられ、提灯の数も1年の日数（陰暦）の360個、真柱（まばしら）には月数の12個が飾られるようになりました。このように18世紀初期に、今に伝わる尾張津島天王祭の祭様式が整いました。宵祭には市江は出船しません。

当時の蠟燭（ろうそく）は非常に高価でしたので、5艘でほぼ2000個もの提灯を飾った宵祭は、それだけでも人々にとって豪華な祭でした。

7月第4土曜日の宵祭の午前10時に、神輿が津島神社から御旅所へ渡御（とぎょ）され、神が祭をご覧になります。この神輿渡御は明治12年（1879）

9月に天王川堤までの渡御が許可されていますので、翌明治13年から行われたと考えられます。江戸時代の尾張津島天王祭の屏風、江戸時代の古書『大祭勘例帳』にも、天王川への神輿渡御の記述はなく、江戸時代には天



王川への神輿渡御はなかったと考えられますが、諸説あります。

津島の5艘の舟の飾り付けなどの準備作業は、すべて車河戸（くるまこうど）と呼ばれる池で行われます。祭河戸（まつりこうど）とも呼ばれます。この車河戸には4つの島があり、その上に屋形が置かれています。1つの島にだけ2台の屋形が置かれています。

宵祭は「試楽（しがく）」とも称されていました。宵祭が試楽であれば、朝祭が本祭ということになります。津島五ヶ村と称された今市場・筏場・下構・堤下・米之座の舟5艘に飾られた数多の提灯が、闇の中に浮かぶさまは言葉に表すことができないほどの幻想的な美しさです。

この提灯を飾った舟は巻藁舟（まきわらぶね）とも試楽船とも呼ばれます。2艘の舟を横に並べ固定し一艘に仕立て、屋形を乗せます。これに長さ9間半（約17m）の真柱（まばしら）を屋形の横に取り付けます。これは如意（にょい）とも呼ばれます。その真柱に1年の月数の12個の提灯を縦につけます。陰暦の閏年（うるうどし）には13個の提灯が取り付けられます。これは、陰暦閏年には13ヶ月あったからです。



屋形の屋根の上に、「坊主」といわれる半円球型の麦の巻藁台（幅約120cm）を置きます。宵祭の提灯舟のことを巻藁舟と呼ぶのは、この巻藁台に由来しています。巻藁台には鉄棒があり、鉄棒に沿って、提灯



をつけた長さ1丈(約3m)の竹竿を坊主に刺し、山型半円球型にします。この鉄枠付き巻藁台こそが提灯を美しく並び付ける秘訣でした。この構造は永く村外秘でした。

提灯は1年の日数を表現しています。現在は400個ほどありますが、これは提灯竹の寸法が長くなるにともなって円周が大きくなり、提灯数を増やさないと隙間ができてしまうからです。

屋形前方には1月の日数の30個の赤提灯を飾ります。これは「なべづる」と称されます。

屋形上部には軒提灯(のきちょうちん)を、屋形中段の四方には赤絹の48個の絹灯籠(きぬとうろう)を掲げます。提灯の中では、この絹灯籠が最も重要視されていました。提灯には蠟燭が必要ですが、灯籠では油、蠟燭いずれでも光源として使えます。提灯が未だ開発されていない室町時代以前に宵祭が行われていたならば、この絹灯籠のみが飾られていたと考えられます。

江戸時代の提灯の蠟燭は、大きさで3種類(現4種類)がありました。絹燈籠には大蠟燭(15匁掛)で48本(挺)、如意も大蠟燭(15匁掛)で12本です。大蠟燭は60本になります。1年の日数を表わす提灯用の中蠟燭は7匁掛が200本、5匁掛が150本です。提灯を飾るとき、早い時間に飾る底部は7匁掛、上部は5匁掛蠟燭が使われました。赤提灯の「なべづる」用も、5匁掛蠟燭で30本です。

午後7時、真柱に12個の提灯の蠟燭に点火され、その後は400個余りの巻藁提灯に順次点火されていきます。

提灯を飾り終えた頃の午後8時に、津島神社の神官と尾張津島天王祭協賛会の代表者を乗せた2艘の赤船が「お迎え」に車河戸へ向かいます。挨拶と準備状況を確認した後、御旅所に戻ります。そして、巻藁舟の出船となります。

午後8時45分、巻藁舟は車河戸から江口を通過して天王川に出ます。津

島笛による奏楽(太鼓・笛)が響き渡ります。先頭の舟(先車)は当番車が務め、毎年順次交代します。当番車はその年の祭の世話役となります。巻藁舟5艘は天王川をゆっくりと渡って御旅所(おたびしょ)に至ります。

天王川には航路を示す30本の「傍示竹(ぼうじだけ)」に提灯をつけて、川中に突き立ててあります。まず、先頭の当番車の車屋一行が上陸して御旅所の神輿に拝礼します。参拝が終わると舟に帰り、続いて各舟が着岸して拝礼します。終わって巻藁舟は再び車河戸に戻ります。

神輿渡御のなかった江戸時代には、車屋は佐屋代官らがいる棧敷(さじき)で挨拶をしました。尾張藩主が御上覧のときには御目見(おめみえ)しました。尾張藩の棧敷は天王川西堤の瑠璃小路にあり、竹矢来(たけやらい)で区切られていました。

宵祭が終わり、津島の5艘の巻藁舟が車河戸に戻ってくると、巻藁舟は夜どおしで朝祭の車楽舟に模様替えします。

朝祭の車楽は柱をすべて金欄(きんらん)で包んだ屋形の上に、金色金具のついた黒漆塗りの屋台をあげ、上段屋台と下段屋台にそれぞれ置物(おきもの)の能人形を安置します。そして朝を迎えます。



## 2、朝祭

朝祭の舟を「車楽舟 (だんじりぶね)」あるいは「車楽」、「車 (くるま)」と  
いいます。一般的に「だんじり」は「壇尻・楽車・山車」米之座車楽舟  
島天王祭では「車楽」と漢  
字表記します。

朝祭では前夜の宵祭とは  
飾り付けを一変した津島の  
車楽舟 5 艘 (津島五車) と  
市江の車楽舟 1 艘 (市江車)  
が出ます。朝祭の先頭は市  
江の車楽舟と定められてい  
ます。



米之座車楽舟



津島の車楽舟の置物 (能人形) には決まり事がありました。

江戸時代、能は 1 日の興行で狂言をはさんで五番行われるのが本式で  
した。これを「五番立」といいます。能番組は、初番目物 (脇能物)、二番目  
物 (修羅物)、三番目物 (鬘物)、四番目物 (狂物・雑物)、五番目物 (切能

物) と 5 種類に分けられます。五番立の番組は、この 5 種のグループから  
それぞれ 1 曲ずつを選び、順に並べます。たとえば、脇能物の「高砂」を  
初めに置き、修羅物の「田村」をその次に置き、以下、鬘物の「羽衣」、狂  
物 (雑物) の「隅田川」、切能物の「鞍馬天狗」が続く、という具合です。  
五番立は 1 日の番組で同趣の曲が重ならないようにするためです。

津島の車楽舟 5 艘の先頭に行く当番車の置物は「高砂 (たかさご)」に定め  
られていました。二番車の置物は二番目物 (修羅物) の中から選ばれ、三  
番車以下も同様です。

市江の車楽舟は朱漆塗りの屋台をしつらえ、水面から大屋台の屋根まで  
の高さは約 15 m にもなります。

市江の車楽舟を例に、車楽舟の構造について説明します。

大型舟 2 隻を横に並べ角材を 4 本渡して「かすがい」で連結し、その上  
に「屋形 (やかた)」を移し上げます。屋形は前方が「妻入 (つまいり)」、後  
方が「平入 (ひらいり)」の構造になっています。屋形後方に階段を取り付け  
ます。以上が「山揚げ (やまあげ)」と呼ばれる作業です。その後、松を後部  
左右端に、若松を中央に立てます。

朝祭の早朝 6 時に「屋台起こし」を行います。屋形の上に「屋台」を置  
きます。屋形の上の前方に小屋台、後方に大屋台を引き起こします。大屋  
台と小屋台は「反り橋」で連結されます。大屋台の屋根は唐破風 (からはふ)  
で、屋台中段に置物の能人形を乗せます。唐破風屋根は市江の車楽舟にの  
み許されました。大屋台の柱は朱塗りです。大屋台と小屋台の下部は金欄  
の屋台幕で覆われています。屋形上部には金欄の軒幕を巡らし、この上に  
金欄や唐織 (からおり) の豪華な小袖を逆さにかけます。これは「逆さ小袖  
幕」と呼ばれます。この逆さに懸けた小袖は、車楽舟の懸装品の中で最も  
重要視されています。

屋形の最前方には「神君様御寄附物」の立て札があり、桐箱が置かれま  
す。桐箱の中には、徳川家康から寄進された金欄の着物が入っています。

市江の車楽舟が徳川家康からの寄進物を持っているということは、江戸時代において絶対的な権威でした。

大屋台、小屋台の置物の2つの能人形は神の依代であり御神体と考えられていました。屋台はご神座であり、神聖な場です。

置物の人形は大屋台・小屋台の能シテ・ワキの2体です。市江では、朝祭14日前に「置物定め」と称して、能26番（江戸時代は100番）の中から神籤（みくじ）で、その年の置物（能人形）が選ばれます。朝祭8日前（陰暦6月7日）には「人形づくり」が行われます。木製の枠型に大麦の藁（わら）を肩・胴の部分に巻き付け、下衣を着せ、選ばれた能番組の衣装・指貫（さしぬき、袴）・能面・持物を人形に着けます。この人形は朝祭前日まで車屋宅に安置されます。

紅梅と白梅の大枝を屋形の屋根前方に飾りつけます。梅花の作り花は、紅紙と白紙を鉄の花型で打ち抜き、八重咲きに貼り重ねたものです。この



作り花は、尾張藩主がご覧になっていた時には、必ず献上されました。雷除けのご利益（りやく）があると伝えられています。

屋形中段には児（ちご）1人と囃子方（はやしかた）の楽打ち（がくうち、太鼓）1人、下拍子（したびょうし、締太鼓）3人、笛役と乗方衆などが乗ります。児は3歳から5歳の男子です。楽打ち・下拍子は9歳から12歳で烏帽子（えぼし）を冠り、素襖（すおう）を着ています。児は、花烏帽子（花の付いた烏帽子）を冠り、大口（裾の口が大きい下袴）を着して、玉襷（たまだすき）を掛けています。玉襷は神霊が宿る襷の美称です。肩に丸撥をかつぎます。児は胸に鞆鼓（かっこ）を持っています。

午前8時40分に、宵祭と同様に赤船による「お迎え」が行われます。午前9時に市江の車楽舟が車河戸を出船します。次いで津島の車楽舟5艘が当番車を先頭に順次、出船します。天王川に突き立てられている傍示竹は提灯から三幣に替えられています。

市江の車楽舟には鉾持（ほこもち）が10人乗船しています。車河戸と御旅所の中程で、舟中から10人の鉾持が登場します。鉾持は裸身（長さ9尺（270 cm）の晒の下帯）で、舟の前部に立てられている布鉾を各々が手にとり、布鉾の竹の根元を水中に差し入れ、この鉾竹から滴る「鉾汁」を口に受けて飲みます。

そして、一番鉾は船首に立つと、背後から大柄杓で水を2回かけられ、布鉾を背負い水中に飛び込みます。古式泳法で御旅所まで泳ぎ渡ります。





次いで、二番鉾から十番鉾が順に飛び込み泳ぎ渡ります。御旅所前に泳ぎ渡った鉾持は、布鉾を捧げ持って御旅所へ上り、神輿に拝礼した後、布鉾を持ち御旅所から神社まで走ります。一番鉾と二番鉾は東鳥居をくぐり、拝殿ではなく社務所に入り布鉾を社務所玄関に立てて奉獻します。三番鉾は楼門前の反り橋に張られた注連縄（しめなわ）を切って、反り橋を渡って拝殿に進みます。そして、布鉾を立てて奉獻します。四番鉾から十番鉾までの鉾持は、三番鉾と同様に布鉾を立てて奉獻します。

市江の車楽舟は十番鉾が飛び込んでから、御旅所へと漕ぎ進み、午前9時45分頃に御旅所に着きます。最初に、市江の献上持ちが車楽舟を降りて、献上物の紅白の梅花と神酒を神輿に奉獻した後、児、車屋一行らが神輿に参拝します。

その後、津島の車楽舟5艘が順次、御旅所に着き神輿に参拝します。午前10時30分に神輿が御旅所から津島神社へ還御されます。神輿の後に市江、津島の米之座・堤下・筏場・今市場・下構の児、囃子方、車屋らが

続きます。この還御は絵巻物を観るかのよう美しい行列です。

津島神社では、市江と津島の当番車が神前奏楽を行い、宮司による児盃（ちごさかずき）の儀式などを行います。すべての儀式を終え、津島神社を出て車楽舟に帰ります。車楽舟は車河戸に戻り、朝祭は終わります。

朝祭が終わってから、「山おろし」が行われ、車楽舟から置物や幕類などの飾り物が降ろされ、次いで屋台、屋形が舟から降ろされます。諸道具は祭小屋や車屋宅に仕舞われます。



### 3、神葎流し神事

朝祭が終わり、津島の人々が寝静まった深夜午前1時に、灯火を全く消した暗闇の中で神葎流し神事が行われます。

神葎（みよし）には、「真の神葎」・葉付・人形（ひとがた）・四垂（したれ）・十二把物（じゅうにわもの）・六把物の6種類があります。最も重要なものは「真の神葎」で、牛頭天王の神霊の依代（よりしろ）です。本殿内陣に1年間奉斎されていた旧の「真の神葎」を新しい神葎に取り替えます。新しい「真の神葎」は台に取り付けられ、12ヶ所を「こより」にて結び飾られています。

旧の「真の神葎」および本年に刈り取られ飾り付けられて外陣に安置されていた他の神葎は神社から搬出され、天王川御旅所下の赤船に乗せられます。赤船2艘を並べて青竹4本を渡したその上に、外陣の神葎を重ね、その上に旧の「真の神葎」を立て上部に御幣を、その下に白扇をくくり付

けます。

赤船は天王川の中ほどに出て、2艘の船は左右に開かれて、神葎は放流されます。陸では、神主（宮司）以下が列拝し、放流の祝詞（のりと）を奏します。終わって一行は行列を組んで境外摂社市神社（米町）に巡拝し、古式の立神楽（たちかぐら）を奏します。帰路は再び天王川を経て神社へと戻ります。

神葎流し神事は尾張津島天王祭の本質で、疫神を流し去るという御霊会の儀式を伝える古式の神事です。

現在の神道思想では、神葎流し神事は人の犯した罪・科を神葎に託して流し去る儀式とされています。



## 津島の事前行事

木曾川支流の佐屋川は、木曾三川分流工事に伴い明治32年（1899）に堰き止められ廃川になりました。同時に天王川も池になりました。

尾張津島天王祭は創始以来、陰暦6月14日に宵祭、15日に朝祭が行われていましたが、昭和38年（1963）から、7月第4土曜日に宵祭、翌日曜日に朝祭が行われるようになりました。

行事は尾張津島天王祭協賛会が執り行っています。

### ◇1月15日

- 奉仕奉告祭（ほうしほうこくさい）

この年の尾張津島天王祭の奉仕を車屋らが神前にて奉告します。

- 車屋当番引継（くるまやとうばんひきつぎ）

当番車は、その年の宵祭、朝祭で津島の舟5艘の一番車となり先頭を進みます。当番車は神社や他地区への種々の伝達などを行います。当番車の順番は、堤下・米之座・今市場・筏場・下構で、これは江戸時代から変わっていません。

- 置物定め（おきものさだめ）

神籤（みくじ）で、その年の置物である能人形を定めます。籤は12本で子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支に準じています。神籤に応じて一番車から五番車の置物が決められていますが、一番車は高砂に定まっています。

### ◇朝祭15日前（陰暦5月31日）

- 斎竹立（いみだけたて）

旧津島五ヶ村の各町の出入口に、注連縄（しめなわ）で結びつけた2本ずつの斎竹を、道路を挟んで高く立てます。斎竹は笹つきの竹です。笹が重要視され、神が憑くという観念です。

それぞれ地区の出入口の2ヶ所に2本ずつですから4本で、五ヶ村で斎竹の総数は20本になります。さらに、車河戸にも立てられます。

斎竹の斎（いみ）は忌み清まるという意味です。斎竹を建てた時から、その地区は不浄・穢れを避けた神聖な場所であるということを表しているのです。この斎竹は朝祭が終わった日の午後に取り払われます。江戸時代は、宵祭前に取り払われ、舟漕竿に用いられました。

### ◇朝祭14日前（陰暦6月1日）

- 稽古始（けいこはじめ）

それぞれの車が、お囃子の稽古を始めます。お囃子は笛・大太鼓（楽打ち）・締太鼓（下拍子）で構成されています。江戸時代初期には鼓（つづみ）もあったと伝えられています。

### ◇朝祭13日前（陰暦6月2日）

- 船下し（ふなおろし）

車河戸の堤の陸上に置かれていた舟（鉄製）を水面に下ろします。江戸時代には、舟は木製で天王川に沈められて保管されていました。

#### ◇朝祭3日前（陰暦6月12日）

##### • 船分（ふなわけ）

江戸時代には各地から舟は寄進されていました。舟には新旧や大小のものがあったため、選ぶ際に争い事が起きるのを防ぐため、「神籤（みくじ）」で決めました。江戸時代は大山舟もありましたので、舟は20艘でした。市江は車楽舟1艘です。船分は行いません。

現在も、船分は古式にのっとり神籤（みくじ）で行われています。舟漕竿をもって待機していた人々は、くじで決まった舟に乗り、早漕ぎをして車河戸にむかいます。

##### • 山揚げ（やまあげ）

車河戸に到着すると、

2

艘の舟をつないで1艘に仕立てます。島にある屋形の下に丸太をかけて、屋形を舟の上に引き上げて固定します。かつては競い合って屋形を乗せ、1番最初に屋形を乗せた舟には、お神酒が振舞われたこともありました。この日、屋形が組み立てられます。



#### ◇朝祭2日前（陰暦6月13日）

##### • 児打廻し（ちごうちまわし）

児打廻しは、津島五ヶ村の児が「児かつぎ」の肩車に乗り、午後7時

頃に華やかな行列で車屋宅を出て、町内の氏神社に参拝してから車河戸へと向かいます。児は、祭期間中は地面を歩きません。必ず「児かつぎ」の肩の上に乗って移動します。

車河戸では、児、囃子方、車屋らが乗船し、午後7時20分頃にお囃子を奏でた後に、当番車の児を先頭に順次、津島神社へ向かいます。

午後8時頃に、津島神社の拝殿前に5本立てられた幕棒の周囲を、児らが3回廻って宵祭・朝祭の安全を祈願します。終わって帰途につきます。



#### ◇朝祭前日（陰暦6月14日）

##### • 宵祭

午後8時45分、数多の提灯を飾った巻藁舟5艘は順次、車河戸から江口を通過して天王川に出ます。津島笛による奏楽（太鼓・笛）が響き渡ります。先頭の舟（先車）は当番車が務め、毎年順次交代します。

##### • 飾替え（かざりがえ）

宵祭が終わってからも行事があります。翌朝の朝祭に備えて、「飾替え」が行われます。

提灯を下ろし、屋形上の巻藁台も下ろします。そして、朝祭の車楽舟用の幕類を張り、屋台を揚げ、置物の能人形を置くなどして朝祭の車楽舟の装いに替えて、朝を迎えます。朝祭の幕は宵祭の幕よりも美しく高価な幕です。

電灯がない江戸時代は、明かりとして油樽に木屑を入れて燃やしました。暗い中での作業は慎重さが求められました。

#### ◇朝祭当日（陰暦6月15日）

##### ・朝祭

江戸時代の車楽舟には風炉（ふる）、釜などの茶道具が持ちこまれ、車屋、乗方衆らが抹茶を喫していました。現在も、今市場の車楽舟などにこの茶道文化は伝えられています。

朝祭では前夜の宵祭とは飾り付けを一変した荘厳華麗な津島の車楽舟5艘と市江の車楽舟1艘が出ます。

### 市江の事前行事

江戸時代、佐屋川を漕上し天王川に入っていた市江の車楽舟は、佐屋川廢川以前から佐屋川の水位が低くなったため、漕上ができなくなり、明治18年（1885）から天王川の車河戸近くの水路から出船していました。朝祭に向けての事前行事の多くは、東保地区で行われており、市江車協賛会と尾張津島天王祭「市江車」保存会が執り行っています。

#### ◇朝祭15日前（陰暦5月31日）

##### ・斎竹立（いみだけたて）

斎竹が立てられます。市江の斎竹（笹付きの竹）は、星大明社（星宮）、東保町の出入り口である3ヶ所、車家の宇佐美家の計5ヶ所に立てられます。2本の斎竹には注連縄が張られ、12枚の紙垂（しで）が下げられます。市江では神酒を斎竹に注ぎ、洗米、鯉節と神酒をお供えします。古来、疫神や邪神が斎竹から中に入らないようにという意味合いがありました。

#### ◇朝祭14日前（陰暦6月1日）

##### ・置物定め（おきものさだめ）（人形定め）

車楽舟の屋台に飾られる置物（おきもの）を神籤で決めます。現在の市江車置物26番組は「1 高砂、2 三條小鍛冶、

3 白楽天、4 還城楽、5 箴、6 鸚鵡小町、7 猩々、8 海士、9 松風、10 鹿島明神、11 熊坂長範、12 安宅、13 烏帽子折、14 鞍馬、15 春日龍神、16 弓八幡、17 羽衣、18 紅葉狩、19 三輪、20 室君、21 東方朔、22 江之島、23 鉢木、24 蟻通、25 花筐、26 竹生嶋」となっています。

置物は能のシテ（主役）・ワキ（脇役）の2体です。

##### ・児定め（ちごさだめ）

児役を定めます。児（稚児）は3～5歳で、花鳥帽子を冠り、裾口が大きく開いている大口袴（おおぐちはかま）をつけ、玉襷をかけ丸撥2本を肩にかつぎ、胸に鞆鼓（かっこ）を持ちます。児のほかに奏楽の楽打ち（太鼓）1人、下拍子（締太鼓）3人が定められます。

##### ・花切（はなきり）・枝切（えだきり）

花切は、車楽舟の屋形左右の前方に飾られる紅白の梅花と朝祭に御旅所の神輿に献上する紅白の梅花を作る行事です。紅白の紙を鉄の花型で打抜き、切り花を作ります。

花を付ける枝の切り出し作業と枝切（えだぎり）もこの日に行われます。切り出された枝は、氏神社の八幡神社に運ばれ、境内に並べ乾燥させて葉を枯らします。

#### ◇朝祭8日前（陰暦6月7日）

##### ・本清火入り（ほんせいはいり）

前日に清火札貼りが行われ、車屋はこの日から本清火に入ります。清火でおこした別火（べっか）で食物を調理して食べます。

##### ・鉾刷ぎ（ほこはぎ）

鉾刷ぎは、鉾を作る作業です。市江の車楽舟に乗っている鉾持10人は布鉾（ぬのほこ）を背に乗せ、天王川を泳いで渡り、津島神社に奉獻します。布鉾は、約3mの青竹の上部を割り、剣型（けんさき）3本を差し

挟んで麻の紐で縛りつけていきます。その下に直角に約60cmの竹を麻紐でしばり、晒(さらし)を折り返し、二重にして取り付けます。

#### ◇朝祭7日前(陰暦6月8日)

##### • 人形作り(にんぎょうづくり)

「置物定め」で決められた能人形(シテ・ワキの2体)が車屋宅で作られます。木枠の骨組である人形台に頭を取り付け、麦藁で胴体の輪郭を作り、面・衣装を着せます。完成した能人形は、朝祭前日まで車屋の宇佐美家に安置されます。

##### • 花合(はなあわせ)・花附(はなつけ)

花合は、花切で作られた切り花を、もち米を粉にしたものに黄色の粉を混ぜて作った糊(のり)で、八重に貼り合わせ作る作業です。花附では、八重の花を枝に付けます。

#### ◇朝祭2日前(陰暦6月13日)

##### • お祓い(おはらい)

児、車屋らが正装し、祭関係者ととともに氏神の八幡神社(愛西市東保町宮越)に参詣します。

#### ◇朝祭1日前(陰暦6月14日)

##### • 御神供蒸し(おみおくむし)

小豆入りの餅米を蒸しあげます。蒸された餅米は、御神供として丸く握られ、行器(ほかい)に納められます。着船後に津島神社に供物として奉納されます。また、朝祭終了後には「お下がり」として関係者に配られます。

##### • 献上物作り(けんじょうものづくり)

献上物は、酒、洗米と紅白の梅花(作り花)です。梅花は雷除けに効験があるとされています。

##### • 山揚げ(やまあげ)・飾付け(かざりつけ)

翌日の朝祭の車楽舟の準備です。天王川の車河戸で舟に山(屋形)が載せられます。そして飾り付けが行われます。

##### • 星宮神事(ほしのみやしんじ)(星宮試楽(ほしのみやがく))

尾張津島天王祭の宵祭が行われる日ですが、市江は宵祭には出ません。市江では星宮神事が行われます。

星宮とは、現在の星大明社(愛西市西保町宮西)のことです。拝殿奥に「神君様御寄附物(徳川家康の寄進品)」と置物人形が置かれます。



拝殿の外には紅白の梅花、布鉾が並べられます。車

屋・児・囃子連中などの祭関係者が星宮に参入し、拝殿では奏楽が行われます。これは「星宮試楽」と称されています。奏楽が終わると、児膳(ちごぜん)が出されます。その後、津島の天王川へ出立します。天王川車河戸に着くと車楽舟に乗船し、奏楽が行われます。

#### ◇朝祭当日(陰暦6月15日)

##### • 屋台起し(やたいおこし)

早朝から車河戸の市江専用の場所で大屋台(後段)と小屋台(前段)を舟に載せて屋形の上に起こします。その後、飾り付けを行います。準備が終わると、児、車屋、奏楽らが車楽舟に乗りこみ、津島神社の「お迎え」を待ちます。

##### • 朝祭

午前9時に市江の車楽舟が車河戸を出船します。次いで津島の車楽舟5艘が当番車を先頭に順次、出船します。

鉾持の布鉾奉献、神社拝殿での奏楽など一連の行事を行い、朝祭は終わります。

## 尾張津島天王祭の創始

尾張津島天王祭の始まった年代については、いろいろな説がありますが、確かな史料がなく、現段階では創始年代は明らかではありません。現存史料としては『大祭筏場車記録』(たいさいいかたばぐるまきろく)があります。それには大永2年(1522)からの車楽舟の置物人形などが記されていることから、16世紀初期以前に祭が行われていたことが分かります。当時の津島は商業経済が発達した「津島五ヶ村」という自治組織「惣(そう)」でした。

これらのことから尾張津島天王祭の始まった年代は15、6世紀とされていますので、500年以上の歴史があります。

祭が始められた中世には、朝祭と神葎流し神事は行われていましたが、当時は宵祭で飾る「提灯(ちょうちん)」がなく、江戸時代とは異なった宵祭様式であったと考えられます。

年代的には、「神葎流し神事」が最も古くから行われ、車楽舟による「朝祭」、次いで提灯をつけた巻藁舟による宵祭が始められるようになりました。

中世の尾張津島天王祭は、現在のような華麗な祭ではなく、当初は質朴な祭であったと考えられます。祭を豪華にするには、地域の経済力が豊かでないとできません。また高い文化水準、信仰と祭への情熱が必要です。これらが揃わなかったら、華麗な祭を創造し、継続することはできません。

津島五ヶ村と称された地域の経済が発展した戦国時代の16世紀初期から江戸時代中期の17世紀中頃までの約150年の間に、祭を観に来る人々

を意識し、更に美しくしようと積極的に風流を取り入れた結果、18世紀初期に、今に伝わる尾張津島天王祭の様式が整いました。

## 織田信長も見た尾張津島天王祭

戦国時代の津島は「尾張の金銀はすべて津島を経由する」といわれ、尾張有数の商業都市(湊を基盤とした町)でした。勝幡城(しょばたじょう)を拠点とする織田弾正忠家(だんじょうのじょうけ)と称された織田信定(おだのぶさだ)・信秀(のぶひで)・信長(のぶなが)の家系は津島の経済力を背景に勢力を伸長し、信秀の頃から主家の清須織田家をしのぐようになりました。

当時の津島は湊町でした。伊勢の桑名、尾張の熱田、知多半島の大野などの湊、さらに木曾三川沿岸部を繋いでおり、様々な物資と人と銭が流通していました。日本史研究者は、織田信秀、信長の尾張での勢力伸長の源は津島と熱田を支配し、金銭を調達していたからであるという点で一致しています。

そして、信長は尾張国を統一し、全国制覇をめざしました。信長の産土神(うぶすながみ)は津島牛頭天王社ですし、津島牛頭天王社の神紋は信長と同じ木瓜紋(もっこうもん)です。信長の天下布武は津島から始まったといっても過言ではないでしょう。

『信長公記』に拠れば、弘治3年(1557)には津島を訪れて、堀田道空宅で風流踊(ふりゅうおどり)を天女の姿で踊りました。

『大祭筏場車記録』の弘治4年(1558)には「上総介様(信長)は天王



橋の上で御見物された、女房たちは橋の近くの棧敷に座られた」と記されています。織田信長が天王川に架かっていた天王橋から祭を見物したことが分かります。

信長は天正10年(1582)6月2日、「本能寺の変」で明智光秀の謀反で自害しました。『大祭筏場車記録』の天正10年の条には「六月二日、明智(光秀)が謀叛をおこし、上様(信長)と殿様(信忠)が亡くなられた。そのため十四日まで祭の準備をしなかったが、十四日に台尻(車楽)だけ、なにも飾らずに「すぐるま」(素車)で江口まで渡した。十五日も同じようにして、天王橋まで渡った。堤下・米之座も「すぐるま」で、台尻(車楽)だけで渡った」(現代語訳)と記されています。飾り物をなくし「素車」で祭を行い、弔意を表したことが分かります。

豊臣秀吉(とよとみひでよし)も津島と深い関わりがあります。秀吉は、淀川で尾張津島天王祭を行おうとしたと伝えられます。

歴代のほとんどの尾張藩主が尾張津島天王祭を見物しました。

初代藩主徳川義直は、万治2年(1659)に御深井で津島の宵祭を模した祭舟を出しました。2代藩主徳川光友は、御座船を天王川まで廻漕し、尾張津島天王祭を見物しました。



『尾張名所図会』

## 尾張藩の藩祭 尾張津島天王祭

江戸時代には尾張津島天王祭を行うにあたって、尾張藩から「三通物(みとおりのもの)」すなわち米・竹・舟の寄進がありました。

### (1) 米

尾張藩は尾張津島天王祭の祭料(執行費)として、津島には米50石(こく)を寄進しました。さらに、天王車田は約14町5反(石高152石余)ありました。これは年貢免除地で、その年貢相当分を祭礼費用に充当しました。市江は、車田として5町4反余(石高53石9斗余)を拝領していました。

### (2) 竹類

尾張津島天王祭で津島が用いる斎竹20本、船竿竹80本、蛇骨竹(じゃこっだけ)50本、提灯竹500本、山結竹(やまゆいだけ)2500本は尾張藩支配の村々から寄進されていました。津島の斎竹は美濃兼山(可児市)から10本、長良(岐阜市)から10本が寄進されていました。

市江は、斎竹4本、鉾竹10本、船漕竿12本が寄進されていました。斎竹は美濃国の円城寺村(岐阜県笠松町)、鉾竹・船漕竿は苅安賀村(一宮市大和町苅安賀)から寄進されていました。

### (3) 舟

津島の舟は50~60石船で、数は20艘が寄進(貸与)されました。車楽舟と大山舟は2艘を平行に繋ぎあわせて1艘仕立てにしますので、20艘で車楽舟5艘、大山舟5艘分になります。

名古屋3艘、鳴海1艘、南野1艘、熱田2艘、今村2艘、蟹江4艘、戸田1艘、佐屋2艘、津島4艘の合計20艘です。

市江の舟2艘(車楽舟1艘分)は、100石船でした。濃州三ヶ湊(現養老町)か寄進されました。市江は大山舟を出しません。

## 大山舟

江戸時代には、朝祭では市江の車楽舟を先頭に津島五ヶ村の車楽舟と大山舟（おおやまぶね）の各々5艘、総計11艘が天王川を渡りました。市江からは大山舟は出ません。大山舟は、「山車（やまぐるま）」「大山」とも呼ばれていました。

大山舟は車楽舟と同じように舟2艘を繋げて1艘に仕立てたものです。船の上に3段の山（高さ12.6m）を組み上げ、さらにその上に野山（高さ1.8m）と人形柱（3.6m）と屋台（1.8m）を組んで、全体を華麗な幕でおおいます。

高さは約20mもあります。2段目の山（二の山）の前部の上に翁・媼（アシナヅチ・テナヅチ）の人形が置かれます。屋台の上には「からくり人形」が置かれました。

先頭の大山舟の人形は「鉄砲打ち」と定められていました。大山舟のからくり人形としては、鉄砲打ち、湯取神事、稲荷、猩々、神子、音羽、戸隠明神、住吉などがありました。その下に作り物の大蛇、大きな鯛と鯉を置きました。

残念なことに、明治新政府の廃藩置県の影響で尾張藩からの助成がなくなったため、大山舟は明治6年（1873）に経済的な理由で廃止されました。

## 古典芸能と尾張津島天王祭

狂言の演目に「千鳥（ちどり）」があります。これには「津島祭」の話が



『張州雑誌』

出てきます。

「太郎冠者は主に酒を求めて来いと命じられて酒屋へ行くが、酒代がたまっているため売ってもらえない。今回分の代金は持ってきたなどと言い、すきを見て樽を持って行こうとするが、止められる。太郎冠者は津島祭を見物に行った話を始め、樽を千鳥に見立てて子供が千鳥を伏せる様子や、山鉾を引く様子、祭後の流鏝馬（やぶさめ）神事の様子などを、仕方を交えて話し、相手がそれにつりこまれているすきに樽を持って逃げる」この狂言「千鳥」に、「つしままつりはおもしろいことじやとききおよふだが おもしろいか」と語られているように、津島祭は室町時代末期から江戸時代初期には全国的に知られていたことが分かります。

津島祭は能楽にも取り入れられています。

能管（のうかん）には「一管（いっかん）」とあって、囃子事や短い楽曲を能管で独奏する形式があります。一管は笛の流派、森田・一噌・藤田、各流派とも重い習い事としていますが、なかでも「津島」は秘曲、大曲としてどの流派でも大切に扱ってきました。「津島」は津島祭の祭礼囃子を取り入れた曲です。

戦国時代、織田信長の近習に伊藤安中という人物がいました。この伊藤安中は「信長の笛役」とまで言われた笛の名手であり、津島祭囃子「津島笛」を広めた人物とされています。この「津島笛」を基に、能管の曲目に「津島」が加えられたのです。

## 絵師が描いた尾張津島天王祭

江戸時代、尾張津島天王祭は全国有数の祭礼となりました。江戸時代の華麗な尾張津島天王祭を描いた絵画は、屏風・絵巻・版画・団扇絵など多岐にわたっています。

版画では初代歌川広重（うたがわひろしげ）が描いた『六十余州名所図会（ろくじゅうよしゅうめいしよずえ）』の「尾張津嶋天王祭り」（宵祭図）、2代目広重が描いた朝祭図が広く知られています。



広重「尾張津島天王祭」

尾張津島天王祭の屏風は金雲極彩色で描かれ、その精緻さと華麗さは観るものを驚かせます。尾張津島天王祭を描いた屏風は、現在9点の存在が確認されていますが、他にも秘蔵品があると考えられます。海外所蔵品はイギリスの大英博物館・フランスのギメ国立美術館・アメリカのカウンティ美術館の3点、国内所蔵品は6点ほどあり、名古屋の徳川美術館、京都の西本願寺、名古屋市博物館など、そして2点は津島の2家に所蔵されています。

『南総里見八犬伝』などを著した曲亭馬琴（きょくていばきん）は、尾張津島天王祭を見物し、「このような大河に大船をうかべて、二千個の提灯を飾っているのだから、その光が水に映って、まるできらめく星のようである。見物の人々は川の左右堤防の棧敷から、あるいは船から祭を見ている」（現代語訳）と『蓑笠雨談（さりつうだん）』に記し、その美しさに驚嘆しています。

## 明治以降の尾張津島天王祭

慶応から明治に改元された1868年、明治新政府は神仏分離令（しんぶつぶんりれい）と神職の世襲禁止、社領の廃止を命じました。津島牛頭天王社では明治元年（1868）に仏教に関わるもの全てが境内から撤去され、翌2年に津島神社と改称しました。神主家、神官家（社家）の多くは世襲禁止により、明治以降に津島を離れました。さらに、明治4年（1871）に廃藩置県（はいはんちけん）が行われました。尾張藩からの米・舟・竹の「三通物」の寄進も全てなくなりました。

明治時代の尾張津島天王祭は津島神社からの補助金と氏子らの協賛金で賄われ、私費祭になっていました。尾張津島天王祭を行う財政はひっ迫し、やむなく明治6年（1873）には朝祭の大山舟5艘が中止になり、現在の朝祭様式になりました。

また、明治32年（1899）には佐屋川が廃川されました。現在のように、天王川が丸池として残ったのは、尾張津島天王祭を行うためでもありました。その背景には、地域の人々の祭にかける情熱がありました。

太平洋戦争の戦時下の昭和19年（1944）と翌20年および終戦後の昭和21年、この3年間は、尾張津島天王祭は神事のみが行われ、宵祭と朝祭は中止されました。祇園祭の山鉾巡行も昭和17年（1942）から昭和20年までの4年間は中止されました。

500年以上もの間、津島と市江の人々が祭文化を大切に次世代に伝え続けた結果、昭和55年（1980）に「尾張津島天王祭の車楽舟行事」は国指定重要無形民俗文化財になりました。

そして、平成28年（2016）にユネスコ無形文化遺産に登録されました。